

わなぐら 和名倉 百年の森



目次

夢の継承.....	1
中津川「山吹沢の森」植林作業.....	2
シリーズ・大滝村の林家を訪ねて 1 山中敬久氏.....	4
仁田小屋の新たな一歩.....	7
感動をもたらした食事づくり.....	8
和名倉の魅力 - 東仙波踏査行報告.....	10
池田良二氏追悼/源頭の一滴は涸れず.....	12
「登山」道を歩んでいた.....	13
食べられる山野草 春その1.....	14
長野県林業総合センター林業研修を終えて.....	15

夢の継承

百年の森づくりの会 会長 内藤 勝久



夢は実現する、実現しないのは夢を忘れてしまうからだ、とかねがね思っている。この活動を始めた7年前、朽ちて倒壊寸前の仁田小屋を案内された。大滝村の所有で、昔は何か月も泊まって山仕事をしたというだけあって、沢の水や景観にも恵まれ、一目で気に入ってしまった。「この小屋を再建しよう」と同行のメンバーに話したものの、成算があるわけではなく、またいつもの夢物語が始まったと思われるに違いない。その後訪れるたびに思いは募り、とうとう助成金の申請をしてみようということになった。

幸い財団法人サイサン環境保全基金様から250万円の助成金をいただいたので、一昨年基礎工事を行い、昨年の11月には延べ520名のボランティアの協力を得て立派なログハウスが完成した。7年前の夢の実現である。ここを拠点にして、高校生や大学生に山仕事を覚えてもらい、また植林の大切さを学んでもらおうと夢が膨らむ。

昨年はまだ中津川で一般参加の植林とシンポジウムを開催し、新しい活動を始めた。2・2haの県有林の伐採跡地を提供していただいたので、ここに環境保全総合研修センターを作りたいとの夢を前号で語った。それが何年先になるうとも夢を忘れずに、皆で力を合わせ活動を続けていけば、必ず実現できると確信している。多くの役員の支持もあるので案外早く実現するかもしれない。

今年から活動の目的を青少年教育に重点を置き夢の継承を計っていきたくと考えている。2、3年の準備期間を経て青少年がどのようなことに関心を持つのか、作業上の危険がどこにあるかを入念に観察し、誰でも安心して参加できるように観察し、誰でも安心して参加できる体制を築きたいと考え種々検討の結果、以前からボーイスカウトの参加を考慮しておられた島崎会員にお願いし、秩父のボーイスカウトとカブスカウトにまず体験していただくことになった。彼らなら野外生活にも慣れているので、存分に植林活動を楽しんでもらえるだろう。父母も加わって40名程度の参加になるといっひよっとすると父母の方がはまってしまいかもれない。夜は賑やかな宴会。子供達は中津川のせせらぎの音を聞きながらどんな夢を見てくれるか楽しみである。

「森は海の恋人」で有名な畠山重篤さんと雑談の折、すでに6000名を超える児童に、牡蠣の養殖場で山の森の大切さを教育されておられることを伺い、また木よりも人間の方が早く育つ事を知らされ、これからの活動のヒントをいただいた。10年後には8歳の小学生も18歳の大学生になる。自分の植えた木の成長を見ながら彼らは、環境保全活動の重要性を理解し、何らかの活動に携わってくれるに違いない。

中津川環境保全総合研修センターに世代を超えた老若男女が集い、山仕事の楽しさ、植物の逞しさ、動植物の生態系、山村の直面する問題点などを学んで行くうちに、水源の森は皆で守らなければいけないという意識が醸成され、山村は賑やかさを、埼玉の母なる川「荒川」は清く豊かな水を取り戻し、百年の森づくりの夢が継承されていくと確信しています。

5月
22・23日

楽しい植林作業に参加しませんか

やまぶき さわ

大滝村 中津川・山吹沢の森づくり

五月、中津川の山々は、美しい新緑につつまれます。爽やかな山風の中での植林作業に、どうぞご参加ください。

中津川・山吹沢の森づくりは、今年から五年間をかけて、多様な植生をもった天然林を目指して森林整備を進めていきます(三ページの基本計画書参照)。何十年も土の中に眠っていた種子や風で飛んできたたくさんの種子が芽を吹き、林ができるように、日本の風土は豊かな自然回復能力を持っています。私たちは、この地域の中心となる樹種の苗を植林することによって、森林再生の力を高めていきたいと考えています。また、今年から、植林作業に欠かせない地域の植生に適した秩父産の苗木を育てていく活動も進めていきます。多くの皆様のご協力とご参加をお願いいたします。

日程 5月22日(土)～23日(日)

一泊二日 中津川キャンプ場泊(日帰り可)

集合 22日午前10時 秩父鉄道三峰口駅

解散 23日午前11時 秩父鉄道三峰口駅

作業内容 植林作業・植生観察

作業場所 大滝村中津川「山吹沢の森」

申込先 4月20日までに電話またはFAXで「百年の森

づくりの会」事務局までお申し込みください。

電話 048 885 6697

FAX 048 882 0245

持ち物

長袖シャツ・防寒具・帽子・軍手・タオル・雨具・水筒・懐中電灯・洗面用具(宿泊の方)

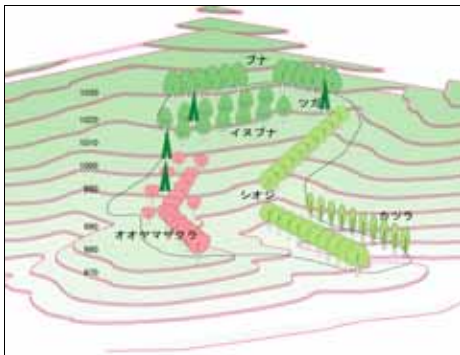
*食事は二日間とも当会で用意しておりますので不要です。

費用

宿泊の場合 3000円

日帰りの場合 1000円

ただし小・中学生は無料。



「山吹沢の森」植林モデル



新ぼくりの道具





中津川県有林森林整備の基本計画

2004年2月19日
百年の森づくりの会

昭和5年(1930年)本多静六博士の寄贈によって生まれた中津川県有林は、秩父の美しい森林を末永く保存する風致林として整備されてきました。私たち「百年の森づくりの会」は、この貴重な地域の一部である中津川山吹沢地区に、スギ伐採後の県有林2.2ヘクタールを県より提供されました。私たちは、これからの森林整備のあり方を求めながら、豊かで多様な植生をもつ自然度の高い天然林として整備し、次世代を担う子供たちの環境教育の柱となるようにこの貴重なエリアを活用していきたいと考えております。また、埼玉の水源林として、水源の森はみんなで守るという活動の場として位置付け、ひろく県民にひらかれた森づくりを目指していきたいと思ひます。

森林は、木材を創り出すだけではなく、豊かで清らかな水を育み、様々な生きものを養い、土石の崩壊をおさえるなどその多様な働きが今見直されつつあります。美しい景観も豊かな森林なしには考えることができません。かつて私たちは、森林に可能な限りの木材生産を求めた時代を経験しています。それは、自然の豊かな植生を奪い、植生の更新に欠かせない母樹や森林環境そのものまで奪うものでした。また、林業をとりまく社会環境のきびしい現状は、必要な森林整備を遅らせ、森林整備の担い手を維持することさえ困難にしています。しかし、私たちは、豊かな森林を守り育てることが、源流から中流域、さらに海に至るまで多くの人々との交流と絆を深め、過疎化のすすむ山間地域を様々な活動で活性化していくものと考えています。私たちは、そのような森づくりをこの中津川県有林で試みたいと思ひます。

1. 森林整備の基本的な考え方

- (1) 中津川「山吹沢の森」の森づくりは200年を目途とし、森に学び、森とともに成長し持続する活動とする。
- (2) 中津川「山吹沢の森」を、自然植生に配慮した関東地方

の「理想的な森づくり」の試行林とする。

- (3) 森林植生の遺伝子的攪乱を招かないように、中津川に適した樹種の苗を使用する。秩父産の苗の育苗・確保に関する技術・手法の確立を目指す。
- (4) 会は常務理事の他に植物・動物・地質などの専門性を持ったスタッフ、行政、林業者と連携し、県民や児童生徒に森づくりの体験や方法を学ぶ場を提供するものとする。

2. 長期整備計画

- (1) 第1次整備期間は、2004年より2008年までの5年間とする。
- (2) この5年間に、このエリアの主木となる樹種2000本を人工的に植栽する。また、埋土種子やカンパ類などの天然下種更新樹種をできるかぎり残しながら、天然林として育成する。
- (3) 2004年度植林の樹種と本数

樹種	本数
ブナ	30本
オオヤマザクラ	50本
カツラ	50本
ヒノキ	100本
シオジ	20本
計	250本
- (4) ブナ・イヌブナ・ミズナラ・ツガ・カツラ・シオジなど秩父産の苗の確保と育苗手法の確立めざす。2004年秋より苗づくりを開始し、2008年には、育てた苗によって本格的な植林を実施する。
- (5) 観察路・作業路の整備
- (6) 観察区での植生調査



林業の先進的試みに取り組む

大滝村落合

山中敬久さん

やまなか たかひさ

昭和24年2月大滝村生まれ。昭和48年慶応大学文学部卒。卒業と同時に山林経営、しめじ生産に取り組む。平成5年よりなめこ生産。「祭なめこ」のブランドで埼玉・東京に出荷。2003年まで村会議員4期16年。昨年より林内路網の本格的な整備に着手。

山林面積：160ヘクタール

樹種：スギ70%

その他ヒノキ、サワラ

特用林産：なめこ出荷高170トン
(2003年実績)

国土の七割を占める森林を健全な姿でどのように守り育てていくのか、様々な試みが行われています。森林と林業をとりまく世界は、いま大きく変わるうとしています。大滝村の林業がこれまでに培ってきたものとこれから目指そうとするものを林家の方々に直接語っていただき、私たちの森づくりへの理解の手がかりにしていきたいと思っています。今号より、五回にわたり、「大滝村の林家を訪ねて」をシリーズとして掲載します。

私は三十年弱近く山からは離れていました。林業では食べて行けず、昭和五十一年にキノコ（しめじ）栽培を始めてからずっとキノコに関わってきましたので、持ち山は荒れるに任せる状態でした。ただ山林を見放していた訳ではなく、その内何とか出来る状態になったら

手入れをして行く気持ちはずっと持ち続けてきました。事業はやれば儲かるというものではなく、山へ掛けるお金はとてもなく、逆に山の木を売って事業に掛けるという状態が何年か続いたこともあります。無節も取れた八十年生のヒノキを伐って、キノコに当てた時は、ご先祖様に申し訳ない気持ちで、それ以降そのことを忘れまいと思いい、十本を残し日々見えています。

しめじ栽培は、四名で「秩父しめじ茸生産販売組合」をつくっていた小鹿野町の鷹啄（たかはし）さんに教えていただき、二年後に組合に入れてもらいました。この組合は迫力満点で、明けても暮れてもしめじ以外は考えないという集団でした。顔を合せればしめじの栽培の話

を暗くなるまでやる、市場の担当者としての値段でケンカをする、ダンボールや包装資材を一年分まとめて買う、良いキノコを出している産地があればボロ車で寝ずに飛んで行くという組合でした。私は一番若く皆さんの後をついていくのが精一杯でしたが、この組合で世間との付き合い、仕事の厳しさ、人情、責任の持ち方等を教えてもらったと感謝しています。

平成五年に決断して、しめじからなめこに切り替えました。一番苦しい時に転換したのですが、素早い決断が出来たのは、今まで世話になってきた組合の皆さんや市場の方の助言と創業以来のお付き合いである長野の機械屋さんのお陰です。このような方々にお世話になり、な

間伐材を組合わせて基礎を造る。大規模林道のように廃土によって森林を傷つけない。



めこ栽培も順調になり始めた頃、私が提唱した「千年の森づくり」をテーマとした大滝村「源流祭」のシンポジウムがきっかけで、当時東京大学の秩父演習林長をしていた仁多見先生と懇意にさせていただくようになりました。平成十一年秋のことです。「千年の森づくり」という言葉がある時、すうと出て来た時は、自分でも不思議な気がしました。これは高校以来ずっと自分の人生の潜在的テーマであった、自己の存在認識を如何にはつきりさせるかという問いに、答えを見出したような思いがしました。秩父の山に暮らしてきた人々は、森林からさまざまな恵を受け、そのことを感謝しながら森林を守り育ててきました。私自身の森林への関わりを「千年の森づくり」の

なかに位置付けることで、私はやっと大地を踏みしめたという感覚を持てるようになったのです。この森林をどのようにして次代の子どもたちに伝えていけるのかを思い始めたとき、大阪府の指導林家である大橋慶三郎氏の「道づくりのすべで」（全国林業改良普及協会刊行）という著書に出会うことができました。大橋氏が提唱される高密度の林内作業路整備は、これまでの大規模な林道開設とは異なり、幅二メートル以内の作業路を森林を傷つけることなく造ることで、山の管理が十分に行えるようになるものです。昨年から路網の整備をはじめましたが、息子たちが軽トラックで簡単に山に入れるようになり、道があることでより山に足が向くようになりました。

材価は低迷していますが、材価が安いと嘆いていても始まりません。どうして安いのかを切り込むことによって、木材業界、建築業界の種々の問題が見えてきますし、何とか打開しようという行動されている多勢の方々がいることも分かります。その過程が大切だと思います。木材搬出には、材価以上に経費がかかり過ぎていましたが、やってみると各種の間伐補助金や林内路網との組み合わせで、採算が取れるようになりました。「馬吉1号」と名づけたマウントホースやリョウシンなどの駆動式集材搬送機によって、自前の労働力で対応できるようになれば、森林経営のあり方も変わってくるのではないのでしょうか。間伐作業も容易になり、しかも伐出された材は、路網整備に役立てられるなど大きな利点もあります。市場の動向ばかりでなく、日本の住環境や住まいの文化に、山の人間が深くかかわることで、大きな社会的責任の一端を担っていけるのではと考えています。

森づくりのための小屋を再建して

仁田小屋の新たな一歩

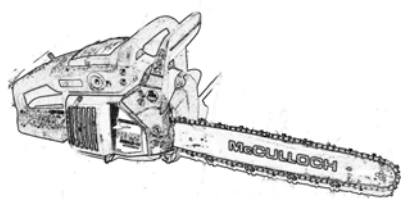
仁田小屋管理委員会 高岡正彦

和名倉の森づくりの拠点となる仁田小屋がようやく再建されました。三年を要した仁田小屋尾根ルートの後元、二〇〇一年初めてのブナの植林、二〇〇三年仁田小屋の改修再建と私たち百年の森づくりの活動は、着実に実績を積み上げてきました。植林、小屋の再建に注いだ会員の努力は、時間的にも肉体的にも並大抵のものではありませんでした。なかでも仁田小屋の改修工事は、多くの会員の力を集めてはじめて達成することができました。この大きな一歩は、会員相互の心をさらに強く結びつけ、これからの森づくりの原動力になっていくに違いありません。また、この改修工事をおして、さらに多くの仲間が広がりまし。きめられた期限の中で、入れ替わり立ち

替わり作業をしましたが、遅々として進まないこともありまし。そのような時、秩父や長瀬のたくさんの仲間が大いに活躍してくれました。毎週週末ごとの作業は、組み上げの大詰めの際には毎日の作業となりまし。参加していただいた多くの皆様に改めて感謝し。豊かな自然が残る和名倉山を守り育てていくことは、私たち「百年の森づくりの会」の活動の柱です。新しい仁田小屋はその活動の拠点となるものです。和名倉山の豊かな森に支えられた大小の動物たちや貴重な植物たち、秩父イワナなどの魚たちや季節ごとに飛び交う鳥たちや昆虫など、私たちが知っているのはそのごく一部です。仁田小屋は、和名倉の大きな自

然の営みを知るための拠点でもありまし。私たちは、森づくりの活動の更なる飛躍をめざして、この新しい仁田小屋を大切に使用していきたいと考えています。

ログの組み立てでは、長期間にわたる光岩（ひかりいわ）小学校の校舎と校庭を提供してくださった大滝村に感謝いたします。また、杉丸太の製材加工でご協力をいただいた東京大学秩父演習林の皆様にも感謝いたします。



仁田小屋建設基金協賛者ご芳名

- 安全安心事業協会
遠藤元信
小澤利雄
籠島延隆
河合都志子
金子宜堅
国土緑化推進機構
サイサン環境保全基金
埼玉県緑化推進委員会
幸島典男
島崎 厚
スマイルハートクラブ
関野史世
セブンイレブン緑の基金
千島 茂
千島初夫
常盤会
富永 勇
内藤勝久
内藤環境管理(株)
成子俊生
戸次桂三
本間俊司
三井住友海上火災(株)
むさしの緑の基金
山口民弥
弓削田悦司
(あいっえお順・敬称略)

(2004年3月末現在)

⑤ 雲取林道ヘリポート 2003. 10. 9



ヘリコプターでの空輸をまつ貴材、天候や風に左右され、前日は雲のため空輸を断念。ヘリコプターは前方の仁田小屋尾根を回って約3分で往復する。

⑥ 仁田小屋建設現場 2003. 10. 10-12



いよいよ現場での本組み開始。

⑦ 仁田小屋建設現場 2003. 10. 25-26



屋根材もあがり、完成に近づきつつある小屋。小屋の窓から雲取山を正面に望む。

⑧ 新仁田小屋前 2003. 11. 24 落成



ここを一つにして成し遂げられた仁田小屋改修作業。百年の森づくりの新たな一歩。

① 大滝村光岩小学校 2003. 8. 16



スクライブを使って切り込みのラインを上に重ねるログに写し取る。最初はなれないため、切り込みすぎたり切り込みが不十分だったり悪戦苦闘。

② 大滝村光岩小学校 2003. 8. 17



チェーンソー、丸鋸カンナの使い方の指導をうけ、ようやく3段目まで組みあがる。

③ 大滝村光岩小学校 2003. 8. 30



建設を指導して下さった菅野町の宮原さんと所沢の市川さん。チェーンソーの名人技に惚れ惚れ。9段積みあがったところで、10段目を新たな土台のうえで組み始める。

④ 大滝村光岩小学校 2003. 9. 27



積みあがったログをばらして、各段ごとに梱包する。ヘリコプターでの空送のため1t以下の重量にまとめる作業が、晴れ上がった校庭で続けられた。

感動をもたらした食事づくり

-主婦たちの奮戦



作業小屋造りの幸せ

野澤 妙子

仁田小屋の窓から雲取山を眺める至福の時、よくぞ

出来たものだと満足感でいっぱいになりました。

梅雨の頃、杉丸太を買っ



て、皮ムキをしてログハウスの山小屋を建てるのだと聞いて、馴れない人が集まって本当に出来上がるのだろうか心配でした。主人は、買付け、運搬の手配、ヘリだのクレーンだのと安いところを探して、何度も何度も電話をしていました。暑い中、毎週頑張っただけで、ずつ積み上げていきましたが、思うようにはかどらないし、夏になってもヘリが決まらずにいました。ところが、お盆に登った塩見岳で出会った九州の方のおかげで、小屋の主人川村さんにヘリ会社を紹介していただくことが出来、道が開けました。十月の連休は、キャンプも張って全員一丸となって小屋組みをしました。女性陣も毎日大滝の奥まで食べ物をお運びしました。「おいしいよ」の一言が幸せでした。十月下旬からは、地元の大工さんと屋根屋さんが山登りと格闘しながら作業をしてくれました。鹿、猿、熊に遭遇して、

大工さんも終わった時は感慨深く、今でもその話で盛り上がります。小屋の入り口の鈴は、熊除けに打ち鳴らしたものです。

今回の山小屋造りは、多くの人の心を結びつけ、やり遂げた満足感の心の中に残してくれました。こんなチャンスに参加できて感激です。これから続く植林活動も、粘り強くあきらめず、大木の繁る山を夢見て、一歩一歩進んでいくことを確信しています。

感動をもたらした仁田小屋造り

島崎千枝子



私にとって、「あの暑い日」東京大学秩父演習林で丸太の製材作業に取り組み主人たちに、家が近かったこともありアイスクリームを差し入れたことがログハウス造りに係わるきっかけになりました。

私たちにもできることはないかと思ひ食事の用意を手伝うことになりました。なにぶんにも、現場に行くだけでも大変だったので、限られたものしかできませんでしたが、カレーライス・すいとん・とん汁・きのこ汁・焼き肉など、心と体が温まりそうなものを中心

に用意しました。夜明け前からご飯をたくさん炊いて、おにぎりを作りおなかにたまるものと考えましたが、汗をかいて疲れた体には、食べにくく汁物の方が良かったという反省もありました。しかし、皆のなごやかやかな顔が見られるとほっとしたものです。

今でも時々、主人と仁田小屋の写真を出しては見ています。それは、数回に及ぶヘリコプターの荷揚げ・丸太の組立そして、仁田小屋の完成写真など……。

その中に写っているのは、皆の真剣な眼差しやきびきびした動きです。そんな写真を見ると、そのつど話が盛り上がり、今のところまだまだ懐かしい思い出になりそうにありません。

振りかえってみますと、事故もなく、けが人が誰もでなかったことが本当によかったと思います。どれをとっても気の抜けない大変な作業にも係わらず、何もないところから皆の力で一つの物を作り上げた「和の力」ではないでしょうか。

これから「森づくり」の拠点となる仁田小屋造りに参加でき、私自身感動をもらいました。

楽しかった三ヶ月

井深 ミヨ

八月三十日、残暑が厳しい日に、ブオーンといチエー

ソリーの音や、威勢の良い掛け声が響き渡っている「光岩小学校」の校庭に、妙子さんと共に到着しました。ログハウスは大勢の人たちの汗と埃の中ですこしづつ積み上げられ、どつしりと構えていたのです。私達は、お茶と食事の仕度に行きました。主人は八月三日から参加していて、話は聞いていましたが実際に自分の目で確かめて驚きました。素人が力を合わせて本当に造ってしまっただなあーと感心しました。それから三ヶ月は、毎週土曜日曜、祭日と完成まで妙子さんと一緒に現場へと通い続けました。秩父名物の「そば」の畑が緑色に風に揺れて「きれいだね」と見て通ったのに、いつの間にかすっかり刈り取られて季節の移り変わりを実感しました。特に十月十一日からの二泊三日の工事の時など、現地まで往復三時間以上もかかる山道を、早朝より出発し、リスに出会ったり、暗くなつて帰って来る途中ライトの中に鹿が現れたり、と疲れも癒される思いでした。大勢の人達の熱い想いが、立派なログハウスとなって完成し、後世までもずっと和名倉山に聳え立っていると思うと、携わった一人として誇りに思います。楽しい思い出として大切にしたいと思いつながら、また何かお手伝いできることがあれば参加しようと思っております。



倉名和 の魅力



2003.12.14

東仙波 踏査行報告



高岡正彦

たかおかまさひこ
百年の森づくりの会副会長
埼玉県立浦和北高校教諭
同校山岳部顧問

東仙波は和名倉山と将監峠を結ぶ稜線にあり、コース上では大した上りは無く

山岳部のOB達の手で、拓けたと聞いてい

すのに時間がかかってしまつくりの不安な出だしたつた。

ちよつとしたコルという感じだ。しかし、雲取林道からみるそれは、仙波尾根を携え立派である。林道からは山頂は見えないが、前衛峰の「カバアノ頭」という三角峰が印象的に目に飛び込んでくる。

二〇〇三年十二月十四(日)、久しぶりに時間ができ、天気も良さそうなので、かねてから考えていた東仙波と和名倉周回コースを歩くことにした。高橋先生の話では十時間ほどかかることである。仁田小屋入口を過ぎ、松葉沢の手前に惣小屋谷への下り口がある。今回はここまで車が

登り出して数分のところから、ヒノキの植林帯が始まる。直径10cm程に育っている。十年前にもあつた記憶があるが、だいぶ大きくなっている。奥秩父山岳会の道標も見つけることができた。「湖父秩・跡屋小惣」と左向きに書いてある。その後、ブナ林が出てきて、尾根に出るが、また左を巻くところはヒノキが植えられてある。巻ききつたところが谷あいの広場「鹿の楽園」になっている。ここは直径20cmほどのブナ林である。葉がみんな落ちていて、陽が

十一年以上前、ここを元川越工業高校山岳部顧問高橋先生に案内された。ここも例の山火事後、林業も衰退し、歩く人がいなくなり以前使われていた仙波尾根の道が藪で覆われてしまっていた。以前の道を知っている高橋先生の案内で降りたのだが、大きな木は倒れ焼けぼっくいしかないので、なにより凄い藪で、方向感覚がまるで保てない。この印象で、「百年の森づくりの会」の前身の活動を始めることになった。しかし県の林務課に問い合わせたところ、大滝村の村有林の仁田小屋尾根を紹介された。東仙波周辺は国有林なのだ。仁田小屋尾根の道も同様に、藪に覆われていたので、まずはこの道を拓くことから始めた。その後、仙波尾根の道は川越工業高校

谷へ降りてから、惣小屋谷と井戸沢を渡る。渡ろうと沢に近づいた時、凍った石に乗ったので足を滑らし、両足とも沢につけてしまった。その後一日中、靴の中で水がぐじゅぐじゅいつていた。天気が良く、風も無い温かい日でしたので助かった。気を取り直して、尾根に取り付く。川越工業高校の仲間と何度が登っているのだが、だいぶ忘れてる。ミツチエル(道しるべ)が無ければ進めそうに無い。ミツチエルを探

差し込む一瞬ほどの広場である。(九時三十分)鹿でなくてもここは楽園気分になれる。これ以降は広葉樹が続く。この季節は冬枯れしていて、陽は差し込むし、眺めもいい。

無ければ進めそうに無い。ミツチエルを探

「出会いの広場」(十時三十分)、「白樺の広場」(十時五十分)などは川越工業高校のメンバーが付けた名だ。ダケカンバが目だってきたところから、スタケがうるさくなってくる。しかし展望は抜群である。

無ければ進めそうに無い。ミツチエルを探



松葉沢から見る
東仙波「カバアノ頭」

雲取山も良く見える。天気恵まれたおかげなのだが、一度経験したらやみつきになりそうである。はっきりいって、和名倉山に登るコースの中で一番展望がある。

スズタケが二mを超えるとところが、二箇所ほどある。十年前にきたときはこのスズタケが下向きにもたれかかっていた、行く手をさえぎっていた。壁のようだった記憶がある。今は人がすり抜けられる程度に刈り込んである。これを抜けると、目の前に「カバアノ頭」が見えてくる。スズタケも膝下程度になる。展望はさらに広がり、「見晴らしの丘」(十一時五十分)では奥秩父の主稜線がはっきり分かる。「カバアノ頭」を巻くと東仙波が見えてくる大した標高差ではないが存在感がある。東仙波の右に和名倉山に続く尾根が見えてくる。「吹上ノ頭」が雪を被り、淑やかにたたずむ。「ラクダの背」(十二時三十分)ではダケカンバだけが転々と迎えてくれる。スズタケは足首程度、可愛いもんだ。山頂(十二時四十分)の三角点が雪に埋まりそうだ。和名倉山の山頂と同じような山頂を示す看板が、ダケカンバにぶら下がっている。また、仙波尾根の方向には、「この尾根は通行できません」という札がかかっている。初めての人はこのルートは危険だ。

山頂からは、小さいが富士山もしっかり拝めた。十三時00分までには着きたいと

思っていたので、まああのペースだ。でも、暗くならない内に下につくためには、のんびりはしてられない。

和名倉山への稜線は、最高に眺めがよい。ダケカンバが心地よい間隔で立ち並んでいる。稜線上の雪が空の青さを惹きかたえている。「ヒルメシ尾根」(十三時三十分)との分岐あたりから、シラビソ、カラマツ林に入る。二瀬尾根との分岐には、「道迷い多発! 現在地をよく確認せよ...」という札があるが、その上にある道標は「仙波ノタル・将監峠・川又」と書かれているが、ゆがんでいる。

山頂直前の「千代蔵休ん場」(十四時00分)は昼寝を誘う場所だと思ふ。山頂(十四時02分)は相変わらず展望はゼロだが、冬枯れのせいか明るい。いや、明るすぎるようにさえ思った。シラビソが後退しているのではないか。ナシ尾根仁田小屋尾根分岐までは落葉松林を歩く。仁田小屋尾根の延長線に雲取山が聳える。このあたりはダケカンバ林だが、落葉松の若い木が伸びてきている。

セカンドフォレスト、一步の森のブナたちは静かな冬眠状態だった。葉を落としていたので定かではないが、活着したようだ。その後は足早に下山。松葉沢に下りて、惣小屋谷入口(十六時二十五分)に着いた。単独行だったし、少々頑張って歩い

たので、八時間で周回できた。この後仁田小屋でのんびりしてから帰ればいいのだが、明日は仕事だ。

今回はまるで動物に遭遇できなかった。鹿の鳴き声も無かったし、小鳥も：ちょっと寂しいが春になったら迎えてくれることだろう。

東仙波と和名倉山周辺は、人が入らなくなつて自然がよみがえりつつあるともいえる。しかし、酸性雨、土砂の流失、狼の滅亡による鹿の大量発生などで、自然荒廃が進んでいることもまちがいない。観光などの営利感覚でもなく、公平重視の行政感覚でもない、山を愛する感覚を広め、結集した最良の計画を実行し、豊かな山づくりを目指していきたい。



会の創立を導いた

亡き池田良二氏を悼む



故池田良二氏

略歴
1957年12月25日埼玉県大宮市生まれる。
1976年春日部高校卒
1981年埼玉大学工学部機械工学科卒
1981年JR東日本入社
2000年8月発病
2003年6月7日享年45才

いま、私たちが活動の拠りどころとしている「百年の森づくりの会」は、平成十二年に創立された。もてる力を傾けて会の設立に尽力したのが故池田良二氏であった。彼のあつい情熱なくしては、現在の会の存在を考えるとすることはできず、また互いに佳き仲間に出会うこともできなかったのではないか。会の成長を目のあたりにするいま、ここに紙面をさいて故人を追悼し感謝の意を表したい。

源頭の一滴は涸れず

内藤 勝久

百年の森づくりの会 会長

私が埼玉大ワングルのOB会長になった時、池田君は幹事となり山行の企画を担当した。日帰りで行ける彼のとっておきのコースをいくつも案内してもらった。笹尾根には二人だけで登った。十八歳も年下の山の友人ができて嬉しかった。創部四〇周年の記念事業に雲取山の清掃登山をすることに

のが精一杯で、下山したあとのビールも欲しくないほど疲労困憊した。

なり彼と二人で偵察に入った。雲取山荘に着くや夕食の準備が始まった。短時間で具の沢山入ったうまいラーメンができた。臭いに誘われて女性パーティーが「おいしそうね」と寄って来た。翌日の下りは彼についていく

翌年彼の同期の高岡君と三人で和名倉山に偵察に出かけた。二瀬からの昔の登山道はスズタケに覆われ苦労したが、植林候補地をこの目で確認することができ収穫は多かった。頂上直下に幕営し、東仙波を往復し再び二瀬に下山したが、あと三〇分のところで足が動かなくなった。枯れ木を杖にほうほうの体で下った。二人はワングル屈指の山男であることを忘れ彼らのペースで歩いたからたまらない。しかしその偵察で百年の森づくりの候補地が確

定した。

彼は百年の森づくりに最初からかわり、作業道の敷設には先頭切つてスズタケを刈り払った。夜のキャンプファイヤーでは山の歌を次から次へと歌集も見ずに歌った。よく冬山に単独でかけ吹雪にも何度も遭ったそうだが、吹雪の夜はきつと山の歌を歌って気を紛らわしていたに違いない。持ち歌が多くなるのも当然だった。

力と体力で癌も退散すると思っていたが、経過は思わしくなく、二度目に新宿の鉄道病院に見舞った時には、会話を長く続けることすらできなかった。「治ったら山に登り、川に顔をつけて水をガブガブ飲みたい」と以前に聞いたことがあったので、神戸の友達を訪ねた折に六甲の水を汲んで、彼への土産にしようとしたが間に合わなかった。告別式で祭壇に汲んできたばかりの六甲の水を供え、弔辞を奉読した。

毎年春と秋に行なわれるワークに毎回欠かさず参加していたのに六回目から姿を見せなくなった。JR東日本の有能な技師でもあった彼は、中央線特急「あずさ」のモデルチェンジの中心として活躍していたので、仕事が忙しくなったのかと思っていたところ、高岡君から肺がんが見つかって手術したと知らされた。吹雪にも負けない精神

源頭の一滴に込められた彼の志を多くの人々に伝えていきたいと思う。

「登山」道を歩んでいた

高岡正彦

百年の森づくりの会 副会長

池田良一。

彼は武道のような「登山」道歩んで来た。私は思っている。

それも師範クラスの腕前だと思っ

ている。道場はもちろん山にあるが、その立ち振る舞いはあらゆるところで発揮されていた。私も一応その道場で手習いを受けていたつもりである。

例えば、ワンダーフォーゲルに入部するころから違っていた。高校時代から奥多摩周辺、中央線（高尾）大月）沿線の山々を一人で歩いていて、そのあたりのことはよく知っていた。

高校時代はテニス部だったといっていたが、信じられない。実際、彼のテニスをみたことないし、テニスの話を聞いたことがない。

彼は行く山のことを綿密に調べ、山容だけでなく花など植物も観察して、山を楽しんでいた。さらに、大学で仲間と登る山を楽しんでいた。これらはおのの独立しているのではなく、一人で歩いてきたからこそ仲間と登れることに楽しみを感じ、仲間と歩きだ

たからこそ山の豊かさまで楽しめるようになったのだと思う。

私もなんとかそのように感じられるようになったのは、経験を積んだ3・4年生の頃である。

彼は山を味わうだけでなく、登山活動をも味わっているのを知っている。

細かい装備を常に+ 持ち、いざというときにすぐに出るのである。間食などにもこだわり、餅やバナナなどを丁寧に持ってきていた。

休憩時の水場では、先を争ってのどを潤すメンバーの後から、水場へやってきて山の水を誰よりも楽しんでいった。また、テント場でテントを広げるとすかさず反対側を持って手伝う。テントの張り綱をしつかり固定して、水汲みに行くなど最後までテントの外で作業していた。

これらを決して嫌がらずに、むしろ楽しんでるかのよう動き回るのである。

後輩への面倒見が一番であった。大学在学中はもちろん、卒業してか

らもちよくちよくワンゲルの役員会（運営委員会）に顔を出していた。後輩があまり「山の歌」を歌わなくなったみたいだと嘆いていた。「ダンチヨネ節」が一番好きだった。

彼はさらにボランティア登山もやっていた。障害者の登山を助けるグループに所属していたようで、たしか視力障害者を富士山に案内したと聞いたことがある。

また、清掃登山も行っていた。ごみを捨てる登山者のことをうんぬんは、言わずに、自分の登山活動のひとつとして行っていたようである。ワンゲルの四〇周年記念山行になった「雲取山清掃登山」の発案者が彼だ。

OB会の活動として、登山活動が必要ということで「日だまり山行（日帰り山行）」を何度も計画し、実行した。「百年の森づくりの会」の準備段階の活動も彼いなくては成り立たなかった。二居のワンゲル山小屋を、OB会の結末の原点に考えていて、山小屋祭りを計画、実行した。

これらから、埼玉ワンゲルを如何に愛していたかを痛感する。

彼の「登山への思い」は、S W V会誌『雲採』第二十三号「山歩・断想」に彼の言葉で掲載されている。

私は大学卒業後も彼と山に行く機会に恵まれ、また彼と共に私も、埼玉ワンゲルOB会の役員として活動させてもらっている。「登山活動のこと」を様々語り合った。

山のピークだけを目指すのではなく、また技術だけを目指すのではなく、しかし山にさまざまなことを求め続けていたと思う。その実行力はピカいちである。

そんな彼との話は、今振り返ると「登山」道のようなものだったように思う。山に登るだけの話ではなかった。実行力で保障された発言なので、全て信用できた。

そんな彼が、3年前、肺がんに冒された。タバコは吸わず、お酒も程々のヤツがだ。

仕事に関しても責任感が強く、過労状態の勤務だったらしいが、そんなことはヤツの体力からして問題ではない。ただ、もう少し発見が早ければ……。もう少し早ければ、たやすく完治させられたらどう。またもう少し遅ければ、手の施しようがなかったらどうと彼が言っていた。肺を大きく切り取り、新薬「イレッサ」に助けられて、職場に復帰した。そのことは

前号の『山恋』に掲載されている。そ

のころはとても元気で、万に一つの奇跡が起るように思っていた。しかし、病魔は確実に、彼の体を蝕んでいた。見舞いに行くと、冷静に自分の体のことを分析し、治療法を理解していた。前途多難だが、絶対に負けないという力強さを感じていた。山の話をする目目が輝いていた。

《イレッサ》の副作用が問題になり、投与中止となった。肺に水がたまる。その水の中にあるたんぱく質・糖分とともに抜かなければならない。体力は落ちる一方。副作用を承知の上で《イレッサ》を始めるが、肺の機能はよみがえらない。気持ちも落ち込んでいるのが分かった。

私に、子供たちのこと、自宅の山道具のこと、山の資料のことを話すようになった。「それらは任せろ」「お前は一日でも長く生きる」と言っしかなかった。

私は、池田良二の歩んだ姿に「登山」道を感じている。言葉で語りきれない、語ればやっぱり違ってくる「登山」道である。活動でだけ、示せるのだと思っている。

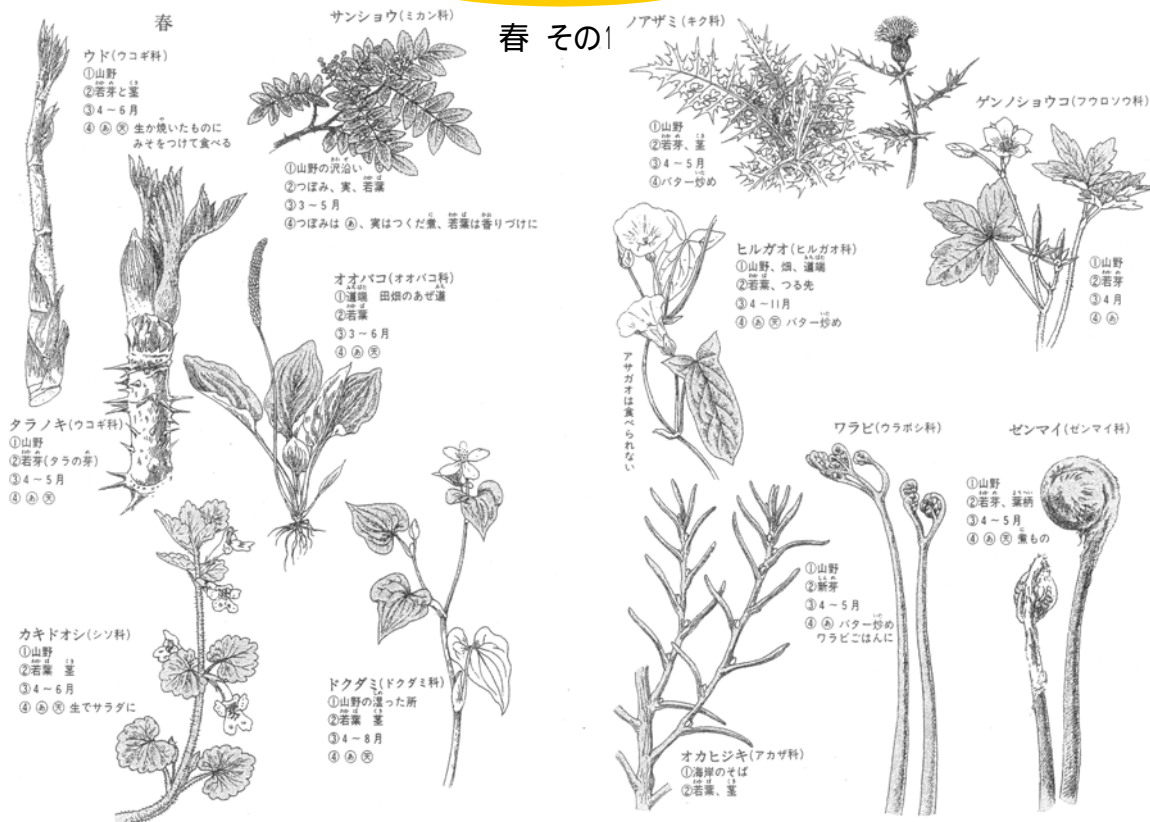
私は思う。

池田良二との出会い、「登山」道へのあこがれ、を生み出したのが『山』であ

私の中でまた『山』がとてつもなく大きくなった。

(この文章は、埼玉大学ワンダーフォーゲル部OB会誌「山恋」と同時掲載しています)

食べられる山野草



長野県林業総合センター 「林業作業体験講座」を終えて

百年の森づくりの会 広報担当 田島克己

北アルプスを西に望む長野県塩尻市の林

業総合センターでの月一回の作業研修に果たして通い続けられるだろうか、というのが最初の思いでした。長野県は、林業作業体験を通して身近な山の手入れに役立てて貰うことを目的に長野県全域から希望者を募り、一年間を通して月に一回、第三日曜日に研修を行っています。これまでは四十名の定員枠を設けて行われていましたが、田中知事の新たな試みとして希望者全員の研修が本年度から実現しました。研修参加者は九十四名、県外からは私と杉並の女性の二人でした。高校生から七十過ぎの方まで年齢幅は広く、定年を迎えこれから自

分の山の整備をしようという方やボランティア活動の指導者など様々な人達が集まり、午前中の講義と午後の実技に毎回熱心に取り組んできました。研修プログラムは、季節ごとに必要な林業作業に応じて組まれています。

四月 開校式・森林観察

五月 植林・山菜（ヒノキ苗の植栽）

六月 除伐（アカマツ不要木の伐採）

七月 下刈り（下刈り鎌による下刈り）

八月 ポケットコンパスによる森林測量

九月 チェーンソーの取扱い

十月 種まき・測樹・特用林産（きのこ）

十一月 間伐（カラマツ林の間伐）選木・

伐倒・枝払い・玉切り

十二月 枝打ち

一月 間伐材搬出

二月 シイタケ植菌

三月 炭焼き

研修の内容は多岐にわたり、林業がこれまでに培ってきたものの奥深さに触れる思いでした。また、経験に裏打ちされた適切な指導は、山仕事の楽しさを引き出してくれるものでした。チェーンソーの指導をはじめて受けた女性の受講者が、見事にアカマツを伐倒したときなど周りから拍手が湧き上がるほどでした。林業は、植物学や地質学、土木や機械工学などを総合する知識と技術のうえに成り立っています。さらに地域の伝統や経験に根ざした技量や洞察に支えられおり、尽きない魅力に満ちています。理論と実際の違い、たとえば、密度

管理図から計算された間伐対象木の目安と実際の林分での選木のしかたの違いなどは、永い経験によって、はじめて判るのではないのでしょうか。塩尻での研修は、森づくりのもつ大きな可能性と楽しさを教えられるものとなりました。



7月 下草刈り作業



8月 ポケットコンパスによる測量



10月 ヒノキの苗床づくり



11月 間伐作業



12月 枝打ち/昔ながの木登り技術「ブリ縄」



2月 室内作業(測量値から製図おこし)

平成16年度上期の活動について

埼玉県植樹祭に参加

4月29日(木)8:30狭山市赤坂の森集合。参加ご希望の方は、事務局までご連絡ください。

中津川「山吹沢の森」植林作業

5月22日(土)~23日(日)、大滝村中津川で植林作業を実施します。参加ご希望の方は、4月20日までに事務局までご連絡ください。中津川キャンプ場で1泊2日で実施。日帰りでの参加もできます。

第14回百年の森づくりワーク

5月28日(金)~30日(日)、和名倉山百年の森づくりワークを実施します。参加ご希望の方は、事務局までご連絡ください。

ワークの主な内容 3班編成

・1班:29日10時発日帰り、和名倉山頂往復

・2班:29日8時発日帰り東仙波~和名倉山
・3班:29日仁田小屋集合小屋の整備・周辺整備
30日「一步の森」「セカンドフォレスト」観察

平成16年度第4回通常総会、特別上映会開催

6月13日(日)午後2時から大宮ソニックシティビル6階601会議室において通常総会を開催します。当日は、「百年の森づくりの会」の活動状況を記録したビデオの上映会を行います。会員の皆様のご出席をお願いします。出席くださる方は、事務局までご連絡ください。

「荒川源流森づくり体験」中津川、大陽寺下草刈り

7月24日(土)~25日(日)に植林を行っている中津川、大陽寺の植林地の下草刈りを実施いたします。参加ご希望の方は、事務局までご連絡ください。

平成15年度下期の活動報告

和名倉山仁田小屋改修工事作業

10月4日~19日の8日間に延べ人数104名の方々にご協力をいただき、仁田小屋現地でのステージづくり、丸太木材の現地への輸送、ログ本組みの作業を行いました。

第13回百年の森づくりワーク

10月24日(金)~26日(日)、22人が参加して第13回百年の森づくりワークを実施しました。当初は新仁田小屋の完成式を行う予定でしたが、工事が遅れていたため、丸太木材の現地への輸送作業および屋根組み作業などを行いました。また、第4回植林地の確認を実施しました。

百年の森交流会開催

11月1日(土)に埼玉大学校内「百年の森テラス」において、百年の森交流会を開催しました。当日は22名の参加をいただき、会員との交流、「百年の森づくりの会」の活動状況の展示をして情報交換をいたしました。

新仁田小屋落成式

11月23日(日)~24日(月)、仁田小屋改修工事落成式を現地にて行いました。当日は27名の参加をいただき、完成を祝いました。

現会員(会員番号 氏名 住所)2003.9.16~2004.3.15入会者

620 小田 稔夫 入間市 / 621 埼玉県損害保険代理業協会 さいたま市 / 622 田坂 邦安 深谷市 / 623 渡辺 美久 和光市 / 624 小舟 敏夫 深谷市 / 625 (株)ウィン 名古屋市 / 626 下倉 利春 さいたま市 / 627 窪田 卓 松戸市 / 628 二宮多実子 皆野町 / 629 平林 知人 さいたま市 / 630 木ノ内勝平 上尾市 / 631 田村 直恵 練馬区 / 632 平 忠雄 皆野町 / 633 山下 芳朗 皆野町 / 634 尊谷 一男 皆野町 / 635 大澤 芳夫 皆野町 / 636 坂本 恭子 皆野町 / 637 出牛 洋行 皆野町 / 638 出牛悦子 皆野町 / 639 四万田 和男 皆野町 / 640 椋沢 榮一 渋川市 / 641 伊藤貞子 大田区 / 642 鈴木 裕子 世田谷区 / 643 大友 一夫 秩父市 / 644 常木 哲也 所沢市 / 645 芳賀 義宜 さいたま市 / 646 横山 敬司 長瀬町 / 647 関野 史世 さいたま市 / 648 小菅 一憲 長瀬町 / 649 安藤 晃二 国立市 / 650 山本 康子 長瀬町 / 651 染野 操 長瀬町 / 652 小林 美智代 中野区 / 653 廣江 恒夫 春日部市 /

654 渡木 一年 さいたま市 / 655 長谷川 郁子 さいたま市 / 656 東 郁子 さいたま市 / 657 藤嶋 和夫 岩槻市 / 658 丸岩 憲吾 さいたま市 / 659 木崎 康雄 秩父市 / 660 木崎 一男 秩父市 / 661 新田 勇 新潟市 / 662 遠山 元信 上尾市 / 663 岩田 泰典 秩父市 / 664 落合 盛光 長瀬町 / 665 馳尾 俊美 川越市 / 666 檀戸 三保子 秩父市 / 667 高杉 恵美子 さいたま市 / 668 石塚 行夫 川越市 / 669 戸次 桂三 さいたま市 / 670 齊藤 幸雄 川口市 / 671 小櫃 市郎 吉田町 / 672 安河内 繁喜 福岡市 / 673 後藤 二三 杉並区 / 674 小川 淳 さいたま市 / 675 南波 廣宜 川口市 / 676 古屋 紀一 さいたま市 / 677 今野 耕作 府中市 / 678 大石 正己 江東区 / 679 望月印刷(株) さいたま市 / 680 嶋谷 義一 荒川村 / 681 齊藤 隆 我孫子 / 682 坂本 裕三 長瀬町 / 683 坂本 裕子 長瀬町 / 684 外塚 博重 さいたま市

- いつでも会員を募集しています -

お問い合わせ先

百年の森づくりの会 事務局 〒336-0015 さいたま市南区太田窪2034-1

TEL 048-885-6697 / FAX 048-882-0245 / E-mail naitoh@saitama-j.or.jp

和名倉百年の森 第7号 2004年3月31日発行

発行 百年の森づくりの会 会長内藤勝久
編集 百年の森づくりの会 広報委員会